

資料調査 上海のユダヤ人難民新聞：『Shanghai Jewish Chronicle』（1939年）の記事から

阿部，吉雄

九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門：教授：国際共生学

<https://doi.org/10.15017/19189>

出版情報：言語文化論究. 26, pp.155-170, 2011-02-07. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

資料調査：上海のユダヤ人難民新聞 『Shanghai Jewish Chronicle』（1939年）の記事から

阿 部 吉 雄

初めに

1938年3月のナチスドイツによるオーストリア併合以降、ユダヤ人への迫害は厳しさを増し、ユダヤ人の海外移住が急増したが^{注1}、彼らを進んで受け入れる国はなく、問題解決のためにアメリカのルーズベルト大統領が呼びかけた1938年7月のエビアン会議も失敗に終わる。この時期、中国の上海租界は入国ビザが不要だったため、1941年6月の独ソ戦開始によってドイツやその支配地域からの出国が不可能になるまでの3年間に約1万7000人のユダヤ人が移住した。^{注2}

移住者の中には数十人のジャーナリストがいた。^{注3} 彼らは上海でも活発に活動し、1939～1941年にユダヤ人難民を読者層とするドイツ語による日刊（朝刊および夕刊）・週刊・月刊新聞約10紙を発行した。その他にも英語やイディッシュ語の新聞、また学術的な定期刊行物や宗教的出版物などが発行された。ユダヤ人難民によるこれらの新聞の中でも最も重要なもののひとつである『Shanghai Jewish Chronicle』は1939年5月に創刊され、最初は週刊だったが、後に日刊になり多くの読者を得た。^{注4}

本稿は現在保存されている『Shanghai Jewish Chronicle』の1939年に発行された版の記事の分析を通して、上海に逃れたユダヤ人難民の意識や関心を明らかにしようとするものである。^{注5}

1939年5月5日号（創刊号）

『Shanghai Jewish Chronicle』は週刊新聞としてスタートした。Ossi Lewin と Ferdinand Kasstan からなる編集室は Hamilton House^{注6}の131号室に置かれ、毎週火曜日午後5時に原稿を締め切り、編集・印刷の上、金曜日に発行した。発行所は同じ Hamilton House の122号室にあった The European Publishing Co. である。紙面はA2版の5段刷り12ページで、価格は1部10（上海）セントだった。

新聞の名称は英語であるが、ドイツ語のページ（8ページ）と英語のページ（4ページ）からなっており、英語版にはドイツ語版にない記事もある。具体的には

- 「抵抗が唯一の道、ユダヤ人への Wedgwood の助言」（第9面39行^{注7}）：下院議員の J. C. Wedgwood 大佐（1872-1943）がロンドンで語ったパレスチナの情勢分析。
- Dr. A. A. Roback 「展望」（第11面178行）：82歳で亡くなったルーマニア出身のイギリス主席ラビでシオニスト・リーダーの Moses Gaster（1856-1939）の紹介。^{注8}
- 「書簡集の出版」（第11面54行）：カイロのイギリス高等弁務官 Sir Henry McMahon（1862-1949）とメッカの執政長官 Hussein（1854-1931）の1915～1916年の書簡集の出版。

について報じている。いずれも上海在住のセファルディ系ユダヤ人が関心を抱く内容であり、上海の政治・経済に大きな影響力を持つ彼らを『Shanghai Jewish Chronicle』が読者層として意識していたことがうかがえる。^{注9}

巻頭（第1面）および英語ページの最初（第9面）に「我々の読者へ」という文章がある。上記の読者層の違いを反映してか、ドイツ語版と英語版では表現や内容が微妙に異なっており、それぞれ訳出する。

ドイツ語版（第1面123行）

〔見出し〕我々の読者へ

『Shanghai Jewish Chronicle』はユダヤ人、特にドイツ語を話すユダヤ民族にとって例を見ない危機の時代に登場する。2000年に及ぶユダヤ民族の流浪の悲劇の中でも、この危機はその形と尖鋭化において比較すべきものがない。

『Shanghai Jewish Chronicle』が語りかける対象は極東のユダヤ人、特にドイツ語を話すユダヤ人である。^{註10} 当地には彼らを互いに結び付ける機関紙がなく、またこの時期彼らはこれまで以上に内面的・外面的な支えと広範囲の情報を必要としている。『Shanghai Jewish Chronicle』は彼らに語りかけると同時に、彼らのためにも語るつもりである。彼らの利益を代表し、人間にふさわしい生活の再建へ向けた彼らの願いを世界へ向けて発信していく。

世界は未曾有の政治的・社会的危機の中にあるだけでなく、精神的・道徳的・宗教的危機にも瀕している。自らが信じる精神的・道徳的・宗教的理念の担い手であるユダヤ民族に主要な攻撃が向けられており、『Shanghai Jewish Chronicle』はこの拡大を続ける偉大な戦いにおけるユダヤ民族の代弁者であろうとする。

『Shanghai Jewish Chronicle』は、『Welt』（世界）^{註11} や『Jüdische Rundschau』（ユダヤ展望）^{註12} のようなドイツ語新聞によって打ち立てられた偉大で名誉ある伝統を再建したいと思う。題辞はTheodor Herzlが40年以上前にその雑誌『Welt』の冒頭に置いたものである。「我々の週刊紙はユダヤ新聞である。侮蔑的なこの言葉を選んだのは、我々がそれを榮譽の言葉に変えるであろうからだ。」^{註13}

ディアスポラの中で移住における使命を果たすと同時に、我々はユダヤ人国家という目標を目指す。我々の眼差しと希望、我々の仕事と戦いはパレスチナへ向けられている。ユダヤ人の民族的故郷の土地は、そこから今日我々に統一への叫びが響いてくるのに適した当然の場所である。この統一への叫びが我々をついに自分の運命を自ら決める勇気と意志に満ちた民族へと打ち鍛えるのである。ユダヤ人の目標である「自らの国家と故郷の大地」の達成に向けたパレスチナにおける同胞の英雄的な戦いに、我々は心を同じくする。

パレスチナとディアスポラはそれゆえ現代のユダヤ人の生活における2つの現実である。『Shanghai Jewish Chronicle』はこの2つの現実を顧慮する。両者を結びつけ、パレスチナと離散先の国々について報道する。『Shanghai Jewish Chronicle』は重要なユダヤ人大居住地各所に大変有名なユダヤ人通信員を抱えている。特にパレスチナでは、ユダヤ人世界において最も優れた人々に数えられる重要な一連の協力者をスタッフにしている。しかしドイツのユダヤ人の運命、彼らの多方面への離散もまた格別我々の気にかかっており、彼の地のいたるところから正確な情報を得るであろう。『Shanghai Jewish Chronicle』は世界政治の変動状況について情報を提供しよう努力するとともに、ユダヤ人の再起とその苦難を和らげるあらゆる建設的で前向きな試みを擁護する。ユダヤの復興のためのいかなる仕事も、ユダヤ人自身の覚悟と尽力をなにより必要とする。我々はユダヤの旗を降ろすつもりはなく、現在の新しいユダヤ人像を世界に示そうと思う。それは苦しめられ追い立てられているが、仕事と戦いで鍛えられ、荒々しい運命のただ中で人間の尊厳を忘れないユダヤ人である。

我々はすべてのユダヤ人読者に対し『Shanghai Jewish Chronicle』へ積極的な関心を向けてくれるよう要請する。我々の課題を達成するにはあらゆる人々の助力が必要である。

編集室

英語版（第9面2段抜き14行）

〔見出し〕我々の読者へ

『Shanghai Jewish Chronicle』はユダヤ人の存在にとって重大かつ危機的な時期に、上海で登場する。

このような心配が多く困難な時に、我々が語りかける相手は極東のユダヤ人、特にドイツ語を話すユダヤ人コミュニティの人々である。『Shanghai Jewish Chronicle』は彼らの利害を代弁すると同時に、彼らに情報を伝えたいと思う。この心優しい国において彼らの生活を守り、その再建の仕事を促進するために、今『Shanghai Jewish Chronicle』が発刊されることは彼らの利害に合致する。

『Shanghai Jewish Chronicle』の目的は、有名なシオニスト機関紙『Die Welt』（世界）や『Jüdische Rundschau』（ユダヤ展望）の名誉ある伝統に連なることである。

ドイツ語版では名指しこそしないものの、ユダヤ人迫害を含むドイツの行動をユダヤ人だけの危機でなく、世界の「未曾有の政治的・社会的危機」、「精神的・道徳的・宗教的危機」とまで弾劾するのに対し、英語版ではドイツへの批判はまったく影を潜めている。これは英語版のスペースが少ないからではなく、外交的対立を嫌う租界の政治風土を踏まえたものであろう。

さらにドイツ語版（第2面96行）と英語版（第9面67行）の両方で創刊の辞が述べられている。

〔見出し〕 文芸欄

この文章を書くにあたり、そして我々の定期刊行物の第1号を発行するにあたり、我々は自分たちと読者を結ぶ絆を強く意識している。現在その移住の途上にある読者は、時間的・空間的に言わば過渡の状態にある。すべての読者へ、遠きにある者にも近きにある者にも、我々の挨拶を送る。「シャローム、シャローム²¹⁴、Larochok Welakoror、遠きにある者にも近きにある者にも、平安あれ、平安あれ。」預言者イザヤ（57.19）のこれらの言葉は、我々の新聞を始めるにあたっての挨拶としてふさわしいものである。人類を平和によって結び付けるこの挨拶は、この時代に生きる我々すべてにとつての慰めであり、心を強めてくれる。現在我々はお互いに頼り合い、これまで以上にすべての人々の隣人愛を必要としている。それゆえに、パレスチナで使われる我々の挨拶「シャローム」は、新たな立場に置かれている我々にとって、我々の新しい隣人たちへ向けるべき言葉なのである。シャロームは平和を意味する。我々に平和を、そして人類すべてに平和を！我々ユダヤ人はいつでもどこでも忠実な市民であり続けてきた。我々を迎え入れてくれた民族の発展のために大きな貢献を行ってきた。2000年に渡るユダヤ人の移住の歴史には、それを証明する例が数え切れないほどある。

中国においてすら、すでに12世紀のマルコ・ポーロの時代に²¹⁵、そしてそれ以前にもユダヤ人移住者がおり、中国の宮廷で平和の構築と文化の発展に影響を与えた。また中華民族を厳しく弾圧した最初のモンゴルの皇帝の下にあって、その政治を和らげることができた。

我々はアジアから出発し、今アジアに帰る、我々の祖先の土地パレスチナに。しかし聖書の時代に Erez Israel にたどり着くために、我々の祖先が最短距離の道筋の代わりに、遠い道ミドバル²¹⁶を選ばねばならなかったように、我々もまた極東を経由して近東にある我々の最終目的地、すなわちパレスチナへ至る長い道を歩まねばならない。そしてここで我々は極東の強大な人種に出会う。それは2つの偉大な兄弟民族であり、いまだ仲違いをしている。しかし兄弟の仲ではよくあるように、この兄弟喧嘩は早晩和解に達するであろう。この和解がなれば、この国全体が我々を平和的で忠実な住民として歓迎してくれるようになるであろうと期待しつつ、我々はそれを待ち望んでいる。これは極東の人種とユダヤ民族の双方にとって有益であり、それはユダヤ民族がパレスチナにおけるユダヤ人国家を宣言し、解放を得るまで続くであろう。我々の眼はパレスチナへ向けられている。我々がどこにしようと、我々はこの目標を目指す。そして有名な Martin Buber²¹⁷ が「共生の中で偉大な力と価値を獲得し、それらを自らのユダヤ的存在と結合させたドイツ出身のユダヤ人は、今パレスチナにおける我々の生活と共同体の建設に重要な貢献をもたらす」と言うように、この自然法則は極東の重要な人種との接触においても、その2つの民族のためにより影響を及ぼすであろう。

O. L.

ユダヤ人が平和を愛し、受け入れ国に忠実な市民であり、その発展に貢献すると強調することにより、ユダヤ人難民の流入を制限しようとする租界当局を牽制する狙いが読み取れる。また、「現在その移住の途上にある読者は、時間的・空間的に言わば過渡の状態にある」と、上海における滞在が一時的なものであることを明言しているが、大多数の難民の移住希望先であるアメリカ・カナダ・オーストラリア等についてはまったく言及されず、あたかもパレスチナが唯一の目的地であるかのように語られるのは、ジャーナリストといえども、あるいはジャーナリストであるがゆえに、シオニズムという建前から解放されていないことを示している。

上に示したのはドイツ語版であるが、この文章もドイツ語版と英語版で違いがある。最も大きな相違点は、「そしてここで我々は極東の強大な人種に出会う」以下のくだりが英語版にはないことである。ドイツ語版はアジア人種を称揚し、また日中両民族和解への期待は日本の五族協和・八紘一宇のスローガンに一致する。第2の相違点はパレスチナを「Erez Israel」（イスラエルの地）と呼ぶ表現が英語版になく、パレスチナを委任統治していたイギリスに配慮していると考えられる。同様にドイツ語版の「ユダヤ民族がパレスチナにおけるユダヤ人国家を宣言し、解放を得る」や「パレスチナにおける我々の生活と共同体の建設」という表現も英語版にはない。第3にドイツ語版では編集者の Ossi Lewin が「O. L.」と署名しているのに対し、英語版ではそれがない。『Shanghai Jewish Chronicle』はユダヤ人難民日刊紙のうち日米開戦後に唯一存続を許されたが、Kranzler はそれが Lewin と日本側との親密さによるものだという他の新聞の編集者たちの意見を伝えている。^{注18}

その他の記事の内容は、第1に難民の上海での生活に直接関係するもの

- 「虹口の猩紅熱、心配無用」（第1面2段抜き24行）：ユダヤ人難民の間に流行した猩紅熱の状況。^{注19}
- 「Conte Rosso 号の到着」（第2面10行）：400人のユダヤ人難民を乗せたイタリアの Lloyd-Tristino Line の Conte Rosso 号の上海到着予定（5月7日）。
- 「ユダヤ教区」（第2面16行）：難民たちのユダヤ教区設立に向けた準備委員会の設置。
- 「Kadimah」（第3面64行）：上海のドイツ語母語者のシオニズム団体 Kadimah への協力の呼びかけ。^{注20}
- 「法律コーナー」（第4面50行）：読者への法律相談。1件40セントの料金は慈善目的に使われる。
- 「上海および中国内陸では移住者にどのような経済的可能性があるか？」（第5面283行）：中国での商業・労務慣行と難民が成功する見込み。
- 「Maccabi 対 Scarab 3 : 3」（第7面84行）：Makkabi^{注21}チームとイギリス海軍チームのサッカーの試合の内容と結果。
- 「ユダヤ人レクリエーション・クラブ」（第7面18行）：「ユダヤ人レクリエーション・クラブ」（Jewish Recreation Club / JRC）^{注22} が主催するサッカー2試合の予告とソフトボールの振興に関する話し合い。
- 「上海のシオニズム・スポーツ団体の統一」（第7面19行）：上海のユダヤ人難民によるスポーツクラブの統合に関する合意。
- 「芸術家クラブの初めての催し」（第8面58行）：「芸術家クラブ」（Artist Club）^{注23} の初めての催しの評価（失敗）。
- 「黄色いポスト」（第8面17行）：『黄色いポスト』（Gelbe Post）の紹介。^{注24}
- 「ドイツ語放送」（第8面24行）：ユダヤ人難民によるラジオ番組。

第2に難民の将来、特に再移住に関係するもの

- 「上海からの再移住の可能性、ミンダナオ、ある新たな入植計画」（第1・2面192行）：フィリピンのミンダナオ島への1万人移住者受け入れ計画。
- 「ユダヤ人移住諸組織が非合法移住を戒める」（第2面12行）：非合法移住を試みる者への経済的義務を今後拒否するという、ユダヤ人移住諸組織からのすべての船会社に対する通告。
- 「パレスチナへの密入国、ちっぽけな貨物船で」（第2面59行）：パレスチナへの年間2万5000人の密入国。
- 「アフリカの医師不足」（第2面55行）：アフリカの衛生事情の紹介。
- 「アメリカを学ぶ」（第3面89行）：アメリカへの再移住に備えたアメリカの地理や習慣の紹介。

- ・「非合法にアメリカへ、アメリカで「再出発」」（第3面209行）：アメリカへの密入国の実態。
- 第3にヨーロッパでユダヤ人が置かれた状況やパレスチナの情勢に関連するもの
- ・「私はゲットー見習いになるつもりはない」（第2面48行）：ハンガリーの国会において、元法務大臣の息子で国会議員のユダヤ人 Johann Vaszony がユダヤ人法を批判。
 - ・「戦時への備え」（第2面36行）：エルサレムのユダヤ人地区での戦時の空襲対策や食料・水の確保に関する議論。
 - ・「移住者は英国納税者の負担になっていない」（第2面18行）：ユダヤ人移住者200人が工場を設置し、雇用を創出しているという『Daily Mail』の記事の紹介。
 - ・「ドイツより」（第4面164行）：ドイツのユダヤ人組織の再編。
 - ・「パレスチナ経済新情報」（第5面96行）：パレスチナの林業・漁業の状況。
 - ・「スポーツ展望」（第7面154行）：パレスチナにおける1938年のスポーツ。
- などが並ぶ。

上記の3つのカテゴリに入らない唯一の記事は、ドイツ語版（第1面62行）・英語版（第11面49行）で Albert Einstein が4月30日にニューヨークで開催された花火万博の開会の辞を述べたことを報じるものである。

また、反ユダヤ主義と移住をテーマとする Gerson Stern^{註25} 作『終わりのない道。あるユダヤ小説』（Weg ohne Ende. Ein jüdischer Roman）の掲載を次号から開始すると予告している。（第4面32行）なお、後の方のページになるほど広告が増え、第6面は広告だけで構成されている。

1939年6月22日号（第19号）

『Shanghai Jewish Chronicle』は1939年6月9日以降、土曜日・日曜日を含む日刊（朝刊）紙になった。そのためかページ数は週刊紙の時の半分（6ページ）になり、価格も半額の1部5セントである。ドイツ語版4ページ、英語版2ページ（第3・4面）からなり、紙面に占める広告の割合は創刊号に比べ半減している。編集には創刊号の Ossi Lewin と Ferdinand Kasstan の他に B. Horwitz が加わっている。

この号のハイライト、そしておそらくこの号が保存された理由は、中国政府と上海のユダヤ人銀行家・工業家 Jacob Berglas の間で交渉中と伝えられた中国南部の雲南へのドイツのユダヤ人10万人移住計画である。（ドイツ語版第1面2段抜き76行、英語版第3面57行）この計画は、英語版でのみ言及された移住者1人当たり500 US ドル（2年分の食費・住居費と地域の工業化のための基金）という中国側の要求や1939年9月の第2次世界大戦開始のため実現しなかったが、上海に移住したもののドイツと中国の経済環境の違いから十分に生活の糧が得られない難民や、ドイツに残した家族・親戚の移住の可能性を探る難民に大きな反響を呼んだ。

その他の記事は、ヨーロッパやアメリカの対ドイツ関連の政治情勢を報じるものが中心であり、ヨーロッパにおける緊張の高まりへの読者の関心を表していると考えられる。^{註26} 6月14日に始まった日本軍による天津英仏租界封鎖（ドイツ語版2件第1・2面計122行、英語版4件第3・4面計261行）もこの文脈で理解すべきであろう。英語版の方が記事の数・行数ともドイツ語版の2倍であり、その内容も英語版は米英の外交的抗議を伝えるのに対し、ドイツ語版は租界からの婦女子の避難や租界への生活物資の搬入など日本寄りの報道と言えないこともない。^{註27} 将来の移住先に関する記事としては、オーストラリアが資産のない移民の移住を認める「オーストラリアが工業のための移民を許可」（ドイツ語版第1面15行・英語版第4面15行）、アメリカの不景気を伝える「工業支援のためジョージア州で一時休業保険が命じられる」（第5面87行）がある。パレスチナに関する記事はな

いが、「ラビ Isaac Leifer の麻薬裁判判決」（第 1 面13行）と「ベルギーの難民キャンプにおけるスポーツ」（第 2 面126行）でヨーロッパのユダヤ人に関する情報を伝えている。

難民の日常に関する記事としては以下のものがある。

- 「Komor 氏からの手紙」（第 5 面87行）^{註28}：2月に難民の子どもたちのためにミルク基金を呼びかけたことに続いて、現在50床しかない Washing Road の移住者病院を200床に増やすために必要な5万ドルの募金の呼びかけ。^{註29}
- 「郵便の接続」（第 5 面38行）：欧米（ドイツ・イギリス・フランス・スペイン・アメリカ）および南アフリカ宛の次の郵便の上海中央郵便局における最終受付日時と到着日の紹介。^{註30}
- 「虹口の公衆浴場」（第 5 面22行）：難民たちが多く住む虹口地区に、上海で初めてヨーロッパ式浴場が開業。医療効果があり、同じ建物に電気治療・マッサージ・マニキュア・ペディキュア等の施設もある。
- 「スポーツ展望」（第 6 面47行）：3人のユダヤ人難民ボクサーの試合の予告。対戦相手はアメリカ人とフランス人。
- 「演劇と芸術、Bella Resek がラジオ出演」（第 6 面 8 行）：ロシア人が運営するラジオ番組へのユダヤ人難民女性歌手の出演予告。
- 「路上の衝突事故で3名が負傷」（第 4 面14行）：ユダヤ人難民の多くが住む地域でのトラック同士の衝突。

1939年9月1日号（臨時増刊号）

この号は第 1 面だけが保存されている。臨時増刊号が発行された理由は、この日の早朝にドイツがポーランドに侵攻し、第 2 次世界大戦の始まりとなったからである。上海とヨーロッパの間には 8 時間の時差があり、新聞の発行は午後の遅い時間であったろう。その記事も以下のように 2 段抜き 14 行のさほど詳細なものではなく、紙面の 8 割は広告で占められている。

〔大見出し〕 戦争！

（Havas）9月1日。ドイツはポーランドとの全国境線において戦端を開いた。すでにポーランドの6都市が爆撃された。その中には Krakau・Grodno・Wilna が含まれる。

〔中見出し〕 併合が宣言される

大管区長 Albert Foerster はアドルフ・ヒトラーへの電報で、ダンチヒの帝国への併合と、ダイチヒの憲法の廃止を宣言した。アドルフ・ヒトラーは本日、以下の布告をドイツ軍に発した。「軍は再び目覚めたドイツ民族の荣誉と生存権のために戦うであろう。私はひとつの可能性しか知らぬ。「暴力には暴力を」

第 1 面だけが保存されているということは、裏面に何も印刷されていないことを意味する。いわゆる号外であったにもかかわらず 1 部10セントの表示があり、本来の 9 月 1 日分の朝刊と合わせて販売したと考えられる。^{註31}

1939年10月22日号（第138号）

10月22日は第19号が発行された 6 月22日から122日後であるため、本来であれば第141号になるはずだが、実際にはそれより 3 号分少なく、途中で発行しなかった日があることが分かる。この号は日刊（朝刊）紙であるが、週刊紙だった 5 月 5 日号（創刊号）と同じ 12 ページからなり、価格は 1 部15セントである。これは同じ日刊（朝刊）紙の 6 月22日号（第19号）に比べ、ページ数は 2 倍だが、価格は 3 倍になっている。紙面に占める広告の割合も約 3 分の 2 に上り、上海の物価の高騰に

なんとか対処しようとする編集者の苦労がうかがわれる。英語版はわずか1ページ（第5面）しかなく、欧州における戦争の影響で多くの欧米人が帰国したというようなことも考えられるが、それ以上に、第2次世界大戦の勃発により上海のユダヤ人難民たちの世界情勢に対する関心が高まり、『Shanghai Jewish Chronicle』のドイツ語版の読者層が増えたことを反映しているのであろう。この号以降、編集者としては Ossi Lewin の名前だけが挙げられている。

この号で最も重要な記事は「新たな移住のための規定」（ドイツ語版第1・10面177行、英語版第5面74行）である。1938年末以来毎月1000人以上流入し続けるユダヤ人難民のこれ以上の増加を防ぐため、1939年8月に共同租界とフランス租界は新たな移住と居住を禁止する。その後、各租界当局の代表者たちが国際委員会を作り、移住に関する新規定を決定した。この記事では共同租界に関する規定を紹介している。その箇所を引用する。

以下の新移住者は共同租界に居住することが許される。

1. 上海において400 US ドル以上（13歳未満の子どもは100 US ドル以上）、もしくは他の通貨でこれに相当する額を持つ者。チケット予約の前に、上記の額を所有していることを船会社または鉄道会社または他の旅行者に証明する必要がある。これらの会社や業者には、上記の額の所有に関する「上海ヨーロッパ・ユダヤ人難民支援委員会」（Committee for the Assistance of European Jewish Refugees in Shanghai / CFA）²³² の証明書が提示されねばならない。
2. 以下の者は「工部局」（Shanghai Municipal Council / SMC）²³³ により入境許可を得る。
 - a) 十分な収入があることを証明された上海に住む難民の直系の家族（両親・配偶者・子ども）、
 - b) 上海の企業家が発行した雇用契約を持つ者、
 - c) 上海居住者と結婚する者。

入境許可証の申請は Cathay Hotel²³⁴ 426号室の上海ヨーロッパ・ユダヤ人難民支援委員会を通して工部局へ提出され、工部局警察が審査し、許可または却下を決定する。²³⁵ 申請書は英語で作成される必要があり、記事では申請項目ごとに模範文章を紹介している。なお、同じ共同租界でも日本軍が警備する蘇州河以北の地域には別の規定が適用され、その内容や申請先はこの号が発行される10月22日に発表予定と報じている。また、「工部局の入境規定の解説」（ドイツ語版第10面217行）という記事では、上記の各項目について以下のように詳説している。

- 第1項の400 US ドル（または100英ポンド）を所持していれば入境できるという規定は、日本軍警備地域には当面適用されない。
- 第2項 a は直系の親族、すなわち両親・子ども・夫および妻に限られ、兄弟・義兄弟・従姉妹・義理の両親等は対象でない。委員会から援助を受けている人々は家族を呼び寄せることができない。
- 第2項 b について、虚偽の契約を申請に添付することは無意味であり、雇用契約は有名な会社のものでなければならず、その会社は被呼び寄せ人の生計を少なくとも1年間面倒みることを書面で約束しなければならない。
- 第2項 c について、偽装結婚は考えるべきでなく、この場合もまた申請者が自らと新婦を扶養できることが証明されねばならない。
- 入境許可証の有効期間は3ヶ月ないし4ヶ月であろう。
- 虹口に居住するつもり入境者、またはそこに住んでいる申請者は、やはり申請を上海ヨーロッパ・ユダヤ人難民支援委員会へ提出する。そこで申請者は登録され、申請の判断および日本当局への送付が行われる。
- フランス租界は当局がパリへ請訓中であるため、当面入境を許可される見込みはない。

「ドイツからの移住」(ドイツ語版第1面60行)では9月26日現在、ドイツからのユダヤ人の国外移住はイタリア経由で主にアメリカ向けにまだ続いていること、ベルリンのアメリカ大使館では移住希望者の呼び出しが行われていること、今やチケットは外貨で支払われねばならない上に、40%の戦争割増金がかかるため、移住は非常に難しくなったことを伝えている。この記事の最後に「ドイツからの知らせは、特定の範疇の人々に関する上海への新たな移住規定が公布されるとすぐに(共同租界についてはすでに規定が存在する)、ドイツへの移住割り当て分も完全に使われることができる」とある。分かりにくい表現だが、ベルリンのアメリカ大使館だけでなく、上海のアメリカ総領事館でも移住手続きを行うことにより、アメリカの移民法によるドイツ出身者への移住割り当てを消化できるという意味に理解できる。それはひいては、上海在住のユダヤ人難民および今後上海へ移住するその家族にとって、アメリカへ移住するチャンスが拡大することになる。

海外からの記事は、当然のことながらヨーロッパにおける戦争に関するものが多い。例えば「1日1日」(ドイツ語版第9面329行)というコーナーには海外からの12の記事が紹介されており、その多くはヨーロッパでの戦争に直接・間接に関連する内容である。一方、わずか1ページの英語版の記事は「新たな移住のための規定」(第5面74行)以外はドイツ語版にはないものばかりで、その性格もドイツ語版とは違い、政治的・外交的な内容になっている。³³⁶ 英語版では他に南シナ海でのイギリス船の沈没、フランス租界でのギャング団の逮捕、上海でのトラックのパンクとバックファイアーの音による騒ぎを伝えている。

上海に関する記事では、蘇州河に架かる Garden Bridge や北四川路付近に住むユダヤ人難民で、子どもを Kinchow Road の「上海ユダヤ人青少年協会学校」(Shanghai Jewish Youth Association School / SJYA School) へのバスによる共同登下校に参加させることを希望する者へ、Embankment House³³⁷で上海ヨーロッパ・ユダヤ人難民支援委員会に申し込むよう呼びかけている(第2面25行)。難民たちにとって、移住により中断した子どもの教育を一刻も早く再開することは重大な関心事であり、1939年初めには120人の難民子弟がセファルディ系およびロシア系ユダヤ人の子弟240人の通う「上海ユダヤ人学校」(Shanghai Jewish School)³³⁸に転入した。しかしその後も難民は続々と到着し、すでに満員の上海ユダヤ人学校に入るには1年も待たねばならない状態になった。また難民の多くは上海ユダヤ人学校から10 km 近く離れた蘇州河以北の日本軍警備地域東部に居住したため、市街電車だと片道1時間かかり、無料バスによる送り迎えが必要という問題もあった。そのためセファルディ系ユダヤ人富豪の Sir Horace Kadoorie が1939年6月工部局から、第2次上海事変(1937年)まで中国人用学校だった Kinchow Road の建物を借り受けて上海ユダヤ人青少年協会学校を設立し、380人の難民子弟を受け入れた。しかし記事にある Garden Bridge や北四川路は2つの学校のほぼ中間に位置し、そこに住む難民の中には子どもを上海ユダヤ人学校に通わせ続ける者もいた。その後、ハイムとしても共用されていた Kinchow Road の建物は学校部分の改修が行われ、1939年11月1日に正式に開校した。その結果、生徒数は500人を超えた。記事は上海ユダヤ人青少年協会学校の新規開校に合わせて、上海ユダヤ人学校から転校する子どもたちの親へ向けられた案内であろう。

さらにタルムード・トララーの開校が予告され、入学申請受付の案内が行われる(第9面2段抜き21行)。タルムード・トララーは上海ユダヤ人青少年協会学校の放課後に、6歳以上の男児にユダヤ教やヘブライ語を教えた。上海に逃れたドイツ・オーストリア系ユダヤ人はキリスト教西欧文化に同化され、多くの難民はかつて自分をユダヤ人としてではなく、ドイツ人・オーストリア人と認識していた。しかし彼らはユダヤ人であるがゆえに迫害され、現在、そしておそらく今後しばらくはユダヤ人として世界各地の同胞から支援を受け、ユダヤ人社会の中で生きていくという現実を前に、

自己の中心にユダヤ性を置くというアイデンティティの再構築を迫られていた。そのためユダヤ教やヘブライ語への関心は自ずと高まった。このタルムード・トララーは1939年12月に日本軍警備地域の Ward Road にある Ohel Moishe シナゴークに開校され、最初は35人の生徒だったが、1941年には120人、1944～1945年には300人が通った。^{註39}

上海のスポーツとして、競馬の結果とユダヤ人レクリエーション・クラブチームが出場する卓球・サッカーの試合の予告が行われる（第11面83行）。

演劇関係では芸術家クラブの冬季公演の第1作としてソフォクレスの『オイディプス王』が予告される。ミルク基金のためのバラエティ・ショー（10月29日）、ロシア風レビュー（10月22日）も紹介される。（第11面63行）また「室内オーケストラ1939」の第2回クラシック・コンサート（10月31日）の案内も行われる。（第11面25行）「室内オーケストラ1939」は上記の『オイディプス王』の上演に際しても Christoph Willibald von Gluck（1714-1787）の『アウリスのイフィゲーニエ』の序曲を演奏する。さらにこの号が発行された10月22日は日曜日であり、この日に各ナイトクラブで上演されるオペラ・オペレッタ・リート・交響詩・バレエ・映画を紹介し、それらの店でのミルク基金への寄付を呼びかけている。（第11面2段抜き86行）

この号から「経済、1939年10月21日の外国為替相場」（第12面18行）として、香港上海銀行における英ポンド・USドルの対上海ドル相場、中国イタリア銀行における上海ドルの対伊リラ・対スイスフランの相場、およびベルギー銀行における上海ドル・英ポンドの対ベルギーベルガ相場を紹介しており、難民が行った輸出の代金や海外からの支援金の交換のために必要な情報だったと考えられる。

5月5日号（創刊号）以来6月22日号（第19号）でも連載されていた小説『終わりのない道。あるユダヤ小説』が、この号では見られない。

1939年12月31日号（第207号）

12月31日は第138号が発行された10月22日から70日後であるため、本来であれば第208号になるはずだが、実際にはそれより1号分少なく、途中で発行しなかった日があることになる。この号は1939年では最大の20ページからなり、10月22日号（第138号）と同じ1部15セントだが、紙面の半分を広告が占めている。依然「ドイツ語版および英語版」と表記しているものの、この号には英語のページがない。

この時期の最大のニュースは11月30日に始まったソ連によるフィンランド侵攻（冬戦争）であり、フィンランド軍の善戦やスカンジナビア諸国による応援の動き、それに対するソ連とドイツの動きに関する4つの記事（第1・3・5面計208行）を掲載している。

ドイツを巡る戦争関連の記事は

- 「ドイツで15時間灯火管制」（第4面66行）、「今日のロンドンの風貌、ロンドンからの通信」（第10面207行）：ドイツやイギリスでの灯火管制下の不便な生活を紹介する。
- 「西部戦線に寒波」（第4面17行）、「ドイツ汽船拿捕される」（第4面24行）：本格的な戦闘に発展しない状況を伝える。
- 「ヒトラーは新年のレセプションを行わず」（第2面13行）、「ナチ支配に対抗する大きな保証、フランスの軍事予算、元老院で認められる」（第4面35行）、「ベルリンとバチカンの接触」（第4面29行）、「イギリスの青書がベストセラー」（第4面20行）：各国の外交や内政に関して。
- 「ヒトラーへのアメリカの批判」（第7面33行）：東欧諸国へのソ連の影響力が増していることをヒトラーの失敗と皮肉るアメリカの新聞の紹介。

など、おしなべて緊迫感がない内容である。アメリカ人300人を含む1100人の乗客を乗せたイギリス客船がドイツのUボートに沈められた「Athenia号事件」（第4面21行）も、4ヶ月前の事件の調査がまだ完了していないことを伝えるにすぎない。第11面すべてを使った「ヒトラーの敵対者たち、第3帝国と闘う連合国の政治家・軍司令官たち」では、保存されている1939年に発行された『Shanghai Jewish Chronicle』として唯一写真を掲載している。^{註40}

その他の海外ニュースは、「イタリアで鉄道大事故」（第1面9行）と「アナトリアで死者3万人、地震の恐ろしい結果」（第3面22行）である。

大みそかということもあってか、上海のユダヤ人難民社会の誕生や第2次世界大戦の開始など多事多難な年だった1939年を振り返るいくつかの署名入り記事が掲載されている。

- Dr. Mark Siegelberg^{註41}「1939年から1940年へ」（第2面214行）：ドイツによるチェコスロバキアの解体で始まった1939年のヨーロッパにおける戦争を略述し、この「人類の利益のために必然的な、平和主義者も認める戦争」がナチスの独裁を排除することを期待。
- Ossi Lewin^{註42}「2度と戦争をしてはならない」（第3面139行）：第1次世界大戦を経験して「2度と戦争をしてはならない」と言っていたドイツの大衆が今ではナチス・ヒトラーを支持していることを指摘し、「大衆がある体制の担い手であり、彼らがある個人の意志を形成し、その全体一致の中に「民族」という名を隠しているのである。それゆえヒトラー支持者とドイツ民族とを区別しようとするとはばかげている。ヒトラーはドイツ民族の理念と意志の化身に他ならない。さもなければ、彼はドイツ大衆のこのように途轍もなく全員一致の盲目的服従を獲得することはなかったであろう。」と主張。
- 前チェコスロバキア大統領 Dr. Eduard Benesch^{註43}「1914年・1939年、2つの戦争、同じ目的」（第5面309行）：戦後のヨーロッパには大・中・小国の間の平和的協働が必要と論じる。
- Heinrich Mann^{註44}「ドイツの反ユダヤ主義」（第7面294行）：掲載された文章は1933年に発表されたエッセー集『憎悪—ドイツ現代史』（Der Haß, deutsche Zeitgeschichte）からの引用であり、Ossi Lewinとは違った観点からドイツ性・ナチス性と反ユダヤ主義について論じる。

1939年6月22日号（第19号）と同様に、欧米（イギリス・アメリカ）およびオーストラリア宛の次の郵便の上海中央郵便局における最終受付日時と到着日を紹介しているが（第14面46行）、その一方で輸送が困難なためドイツ・オーストリア・ポーランド・チェコスロバキア向けの小包の引き受けをただちに停止するという上海中央郵便局の発表を伝えている。（第13面14行）

この号では、大みそかにふさわしい内容の2編の小説 Jichok Lejb Perez^{註45} 作『仕立屋 Berl』（第9面379行）と Lux 作『隣人』（第9面110行）を掲載している。またユダヤ人難民で俳優の Erwin Engel（1881-?）が日本の正月の寄席芸人の様子を連想させる「ウィーンの喜劇俳優たちの大みそか」（第8面303行）について語っており、読者はヨーロッパでの大みそかの気分を味わえる。この号で初めてクロスワードパズル（第10面4段抜き）が見られる。

「1939年12月30日の外国為替相場」（第14面17行）において10月22日号（第138号）と同様の上海ドルと英ポンド・USドル・伊リラ・スイスフラン・ベルギーベルガの為替相場を紹介している。10月22日号と比べて、英ポンドが上海ドルに対して1.3%の値下がり、USドルが0.8%の値上がりなど、目だった変化はない。

この号の特徴はむしろ上海のユダヤ人難民の生活や活動への関心が大きくなっていることである。

- 「上海の Daljewcib-Hicem^{註46}の任務」（第13面245行）：1922年からハルビンに置かれていた Hicem の極東事務所が1939年9月に上海へ移転したことに伴う業務権限の混乱と、Hicem 本部のあるフラ

ンスにおける海外送金の封鎖により、上海のユダヤ人難民が経済的支援を得られなくなっていることに関する極東事務所からの説明。

- 「新しいシオニズム組織の新年パレード」(第13面16行): Brith Hachayal と Brith Trumpeldor^{註47}の毎年恒例のパレードが、35 Moulmein Road のユダヤ人クラブの向かいの中国人学校で行われることの予告。
- 「連絡」(第13面3行): 「ヨーロッパ難民救援国際委員会」(International Committee for Granting Relief to European Refugees / IC) は1月1・2日休業。
- 「寄付」(第13面9行): IC のミルク基金への個人寄付、ユダヤ人の慣習に従って IC が行っていた仲裁裁判所の料金からの寄付、および IC の学校基金への個人寄付を紹介。
- 「虹口のバスの日本の料金」(第13面47行): 日本軍警備地域へ向かうバスでは、新年から日本軍の軍票しか使えない。上海ドルと日本円の為替相場の関係から若干の値下げになる。

「主婦のページ、上海の安くておいしい料理」(第15面152行)と「今週のレシピ」(第15面82行)では、ユダヤ人難民の食費が収入に比べて高く、その理由は主婦たちがヨーロッパで慣れ親しんだ食材や料理に固執しているからだと指摘し、上海の市場で安く購入できる食材を使ったヨーロッパ風味の料理を紹介する。またその食材の中国語の発音をアルファベットで表記すると同時に、中国人商人が理解できるように漢字表記も印刷している。

演劇関係では、ユダヤ人難民でジャーナリストの Fritz Friedlaender (1901-1980) が「暗闇の中の明かり」(第6面162行)で、ドイツの啓蒙思想家 Gotthold Ephraim Lessing (1729-1781) を「現在ヨーロッパに広がっている恐怖と野蛮の暗闇の中の灯台」と呼び、芸術家クラブによるその戯曲『賢者ナータン』(Nathan der Weise) の上演を「これは単なる芸術的な事象ではなく、言葉の全面的な意味において政治的表明である」と評価している。その演出を担当した Alfred Dreifuss は「舞台裏にとどまる者たち」(第8面160行)において、舞台にかかわる様々な人々の仕事の重要性を紹介し、今回の上演への自信をのぞかせている。「舞台と音楽、芸術家クラブの1月のプログラム」(第14面58行)では『賢者ナータン』以外に喜劇とレビュー・オペレッタの上演も予告されている。Dreifuss は「工部局交響楽団、第12回シンフォニー・コンサート」(第14面84行)の記事も書いており、上海のユダヤ人難民社会における芸術活動の中心人物の一人であることがわかる。「上海のユダヤ人芸術家」(第14面42行)ではユダヤ人難民の指揮者 Henry Margolinsky のロシア人オペラにおける成功、同 Leo Schoenbach (1892-1945) のロシア・オペレッタでの活動、歌手 Lisa Robitschek, Bella Resek, Ernst Krasso, Max Warschauer の工部局交響楽団との共演における成功、同 Robitschek, Krasso の工部局交響楽団との共演の予定が紹介される。

「スポーツ展望」(第10面70行)では、12月31日に行われる上海フットボール・リーグのユダヤ人レクリエーション・クラブチームおよび Makkabi チームの2試合、各ハイムのチームなどが参加するユダヤ人リーグの3試合が予告されるが、先の2チームは出場選手全員の名前が紹介されており、その人気ぶりがうかがわれる。「チェス、チャンピオン E. Glass の解説」(第10面68行)では上海選手権の試合結果の紹介とイギリスの試合の解説が難民の E. Glass によって行われる。

終わりに

『Shanghai Jewish Chronicle』は「極東のユダヤ人のための新聞」を標榜しながら、1939年に発行され本稿で調査した号に限って言えば、極東に関する報道は上海に限られ、2500人のユダヤ人を擁した中国東北部のハルビンおよび天津・大連や日本の神戸等のユダヤ人社会に関する記事は皆無である。パレスチナについては、保存されている号では5月5日号(創刊号)において4つの記事を取

り上げたきりであり、上海のユダヤ人難民の関心がさほど盛り上がりなかったことを示している。またヨーロッパ、特にドイツ・オーストリアのユダヤ人が置かれた状況については、第2次世界大戦の開始によりドイツからの情報が入りにくくなっている事情があるにしても、上海には1万5000人以上のユダヤ人難民がいて、通常の郵便による連絡がまだ可能であったことを考えると、情報収集の意欲はあまり感じられない。難民たちが戦争の行方に目を奪われている間に、ホロコーストへの歩みは確実に進んでいたことにジャーナリストも気づかなかった。その一方で、将来の再移住に影響を与える世界情勢の進展を紹介しつつも、足元の上海のユダヤ人難民社会を取り上げる記事が増えていく。これらの変化は、当面は上海において生活の再建に集中しようという難民たちの意識を反映しており、難民の集団がコミュニティに移行しつつあったことに対応していると言えよう。

注

1. ウィーンでは1938年8月 Adolf Eichmann がユダヤ人移住本部 (Zentralstelle für jüdische Auswanderung) を設立し、その効果的な活動は全ドイツのモデルとなる。流れ作業的処理によりユダヤ人は財産を取り上げられ、パスポートと出国に必要な書類を与えられた。1年半の間にオーストリアから追い出されたユダヤ人は15万人に上る。1939年に入るとベルリン・ブレスラウ・ハンブルク・フランクフルトにもユダヤ人移住本部が設置された。
2. ユダヤ人の大量流入に対して、上海の租界当局が1939年8月に新規の移住を一旦禁止した上で、10月に厳しい移住制限策を導入した後は、すでに上海にいるユダヤ人難民の家族であるか、ユダヤ人組織やアメリカにいる親戚・友人の援助によって一定額の資産を呈示できた人々のみが入境を許された。また太平洋戦争の直前に、日本に滞留していたポーランド系ユダヤ人難民が強制的に上海へ移送された。拙稿「上海のポーランド系ユダヤ人難民」、『言語科学』(44) 2009年、九州大学大学院言語文化研究院言語研究会、123～124頁。
3. 上海のドイツ総領事館への約1万人のユダヤ人難民の届出記録によれば、1940年1月時点でジャーナリスト32人・印刷工23人(いずれも男性のみ)がいた。拙稿「上海のユダヤ人難民に関するドイツ総領事館の報告(1940年1月)」、『言語文化論究』(17) 2003年、九州大学大学院言語文化研究院、121頁。またユダヤ人難民5351人を採録した『移住者住所録』(The New Star Company、1939年11月)ではジャーナリスト・特派員・編集者等の合計が50人を超える。拙稿「資料調査：上海のユダヤ人『移住者住所録』(1939年)」、『言語文化論究』(17) 2003年、九州大学大学院言語文化研究院、150頁。
4. 興亜院華中連絡部『上海ニ於ケル猶太人ノ状況(主トシテ欧州避難猶太人)』(1940年1月)26頁では、週刊紙時代の『Shanghai Jewish Chronicle』の発行部数を約3000部としている。
5. 現在、ドイツ国立図書館が進めているプロジェクト「亡命新聞・雑誌のデジタル化。1933～1945年のドイツ語による亡命定期刊物」(Projekt “Exilpresse digital. Deutsche Exilzeitschriften 1933-1945”)により、『Shanghai Jewish Chronicle』の1939年5月5日号(創刊号)・6月22日号(第19号)・9月1日号(臨時増刊号)・10月22日号(第138号)・12月31日号(第207号)がインターネットを介して閲覧可能である。(http://deposit.d-nb.de/online/exil/exil.htm)
6. Hamilton House は蘇州河以南の共同租界の江西中路と福州路(当時の四馬路)の角に位置し、1931年ボンベイから上海へ移ってきたユダヤ人富豪の Sir Victor Sassoon (1881-1961) が1933年に建築したオフィスビルである。現在の福州大樓。

7. 記事によって字のサイズや語間のスペースの大きさに差があり、また2段抜きの見出しや記事の場合も同じ1行と数えるため、本稿で示す行数は記事の大まかな分量を表しているにすぎない。
8. Abraham Aaron Roback (1890-1965)。ポーランド生まれの心理学者で、ユダヤ（特にイディッシュ語）文化の解釈を行った。Moses Gaster は1939年3月5日に亡くなった。
9. バグダッド出身のセファルディ系ユダヤ人とイギリスやシオニズムとの関係については、拙稿「上海のセファルディ系ユダヤ人」、『言語文化論究』（20）2005年、九州大学大学院言語文化研究院、41～53頁を参照されたい。
10. 1939年当時、上海にはドイツ・オーストリア系ユダヤ人が1万5000人、ロシア系ユダヤ人が4000人、セファルディ系ユダヤ人が数百人いた。また中国東北部のハルビンにロシア系ユダヤ人が2500人いた。その他にも天津・大連・神戸等にユダヤ人コミュニティが存在した。
11. Theodor Herzl (1860-1904) が1897年にシオニスト運動の機関紙として創刊した週刊紙。ウィーンとケルンにおいて1914年まで発行された。
12. 1902年にベルリンで創刊されたドイツ語によるユダヤ人週刊紙。1938年11月9日のナチスによる全国的な反ユダヤ人暴動「水晶の夜事件」の後、発行が禁じられた。
13. 本来の『Welt』創刊号（1897年6月4日号）では wir ... wollen daraus ein Wort der Ehre machen.（我々は…この言葉を榮譽の言葉に変えようと思う）だが、『Shanghai Jewish Chronicle』では wir ... werden daraus ein Wort der Ehre machen.（我々は…この言葉を榮譽の言葉に変えるであろう）になっている。記事の作者の単なる記憶違いか。
14. ユダヤ人の挨拶。ヘブライ語で「平安」の意味。
15. 11世紀には北宋（960-1126）の首都開封に70家族500人からなる最初の定住ユダヤ人のコミュニティが成立し、1163年にシナゴグが建てられた。マルコ・ポーロ（1254-1324）がアジアへ旅行したのは1271～1295年であり、「12世紀のマルコ・ポーロの時代」というのは誤り。
16. ヘブライ語で「荒れ野・砂漠」という意味。
17. Martin Buber (1878-1965)。オーストリア出身のユダヤ人宗教哲学者・社会学者。1938年にパレスチナへ移住した。
18. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (1976), S. 365. また上海ユダヤ人難民で演出家の Alfred Dreifuss (1902-1993) によれば、日本軍が上海に導入した自警団（実際は住民の相互監視体制）「保甲」が1942年9月からユダヤ人難民にも適用されるようになったが、2人の隊長のうちの1人はOssi Lewinだった。Alfred Dreifuss: „Shanghai – Eine Emigration am Rande“. In Eike Midell u.a.: „Exil in den USA“. Frankfurt a.M. (Roderberg Verlag) 1980, S. 481.
19. 1939年5月に発生し、難民支援委員会では隔離病棟を設置して感染拡大の防止に努めた。拙稿「上海のユダヤ人難民社会における医療」、『言語科学』（45）2010年、九州大学大学院言語文化研究院言語研究会、86頁。
20. Kadimah は Nathan Birnbaum (1864-1937) や Peretz Smolenskin (1842-1885) らが1882年にウィーンで創設した最初のユダヤ民族主義学生団体。上海ではすでに1916年にロシア系ユダヤ人がKadimahを組織していた。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 63.
21. Makkabi は上海のKadimahのスポーツ部門。
22. Kranzlerによれば、1912年に発足したユダヤ人レクリエーション・クラブは多くのスポーツ活

- 動を後援し、その中には上海フットボール・リーグに参加したサッカーチームも含まれていた。セファルディ系ユダヤ人やロシア系ユダヤ人に加えてドイツ・オーストリア系ユダヤ人難民も参加したが、難民たちは多くのスポーツで優位を占め、サッカーではチームの11人のうち8人が難民だった。ボクシングと卓球では難民の優位はさらに大きかった。それゆえ難民の流入により上海のユダヤ人社会のスポーツは活性化された。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 393.
23. 芸術家クラブは Ossi Lewin が1939年春に設立した。
 24. ウィーンで精神分析医でユダヤ人難民の Adolf Josef Storfer (1888-1944) が1939年5月1日から上海で発行した隔週紙。
 25. Gerson Stern (1874-1956)。ドイツ系ユダヤ人作家で、1934年に出版された代表作『終わりのない道。あるユダヤ小説』は、ナチスが政権についた1933年から第2次世界大戦開始の1939年間のドイツにおけるユダヤ人文学にとって重要な作品である。1939年3月エルサレムに移住した。
 26. この種の記事の見出しだけを挙げる。ドイツ語版：「(バルト諸国への保障に関する) フランスの提案を(イギリスが)採用」、「ポーランドでドイツ人撲殺される」、「ズデーテン地方のドイツ人への赦免」、「チェコの金のドイツへの引き渡しに関する(イギリス)下院審議」、「ダンツィヒの抗議をポーランドは退ける」、「駐リバプール・ドイツ領事が召還される」、「ポーランドが反イタリア・ボイコットを宣言」、「(5大国会議を招集するという)パチカンの提案へのポーランドの回答」、「ドイツとイタリアの海将たちの会合」、英語版：「Roosevelt は早期の中立法発動を望む」、「東洋における(アメリカとイギリス・フランスの)利害は同一」、「アメリカの産業は武器生産の準備完了」、「スパイ告訴の後、駐リバプール・ドイツ領事が召還される」、「(駐モスクワ・イギリス大使) Seeds は対話を急ぐよう求められる」、「アフガニスタン・イラク・イランとの条約に忠実なエジプトをトルコが支持、イギリスは協定の拡張に賛成」、「スペイン外交官、枢軸国条約を否定」、「ドイツ紙、(アラブ)独立運動への同情表明」、「法律改定への(アメリカ議会外交委員会委員長) Bloom の計画は平和を招来する大きな助け」、ドイツ語版・英語版：「ロシアがアジアで(戦争の場合の境界線)の保障を要求」、「通貨密輸業者をジェノヴァで逮捕」、「米国議会が潜水艦事故を調査」。
 27. 日本側はドイツ語版・英語版ともチェックしていたであろうが、ドイツ語版と英語版の編集方針の違いは、英語を読めない多くの難民への影響に反映したに違いない。
 28. 1938年8月上海のユダヤ人難民が約200人に達した時、チェコ人とドイツ人(いずれもユダヤ人および非ユダヤ人)のグループがヨーロッパからの難民のための「ヨーロッパ難民救援国際委員会」(International Committee for Granting Relief to European Refugees / IC)を作る。責任者は1898年から上海に在住する、キリスト教に改宗したハンガリー系ユダヤ人実業家 Paul Komor (1886-1973)で、すぐに Komor 委員会として知られるようになる。Sir Horace Kadoorie (1902-1995) や Sir Victor Sassoon など数人のセファルディ系ユダヤ人富豪やロシア革命を逃れて上海に移住したユダヤ人が参加した。
 29. 移住者病院を最初 Washing Road ハイムに、後に Ward Road ハイムに設置した。ハイムは自力で住居を借りることができない2500人の貧しい難民のために、支援委員会が虹口東部・揚樹浦西部に数箇所設置した収容所。
 30. 例えばドイツまでは、船と鉄道によるシベリア経由で約20日、船と飛行機で約10日を要した。
 31. 臨時増刊号自体にはページ数は印刷されていないが、「Exilpresse digital. Deutsche Exilzeitschriften

- 1933-1945」では「第7面」と表示されており、筆者（阿部）と同じ理解であると考えられる。
32. 予想されるユダヤ人難民の大量流入に備えて、上海在住のユダヤ人社会が1938年10月に設立した。
 33. 共同租界の行政組織。
 34. Sassoon 財閥が1929年に完成させた、黄浦江に面するバンド（外灘）の代表的建築のひとつ。現在の和平飯店北楼。
 35. 1939年版『上海共同租界工部局年報』（南満州鉄道株式会社調査部上海事務所調査室訳）の「1939年の概観」によれば、この規定により約300通の許可証が発行された。
(<http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Forest/1429/colo/shanghai2.html>)
 36. このことは見出しだけでもある程度うかがえる。ドイツ語版の記事の見出しは「U ボート対商船の戦い」、「250機のアメリカ製飛行機がヨーロッパへ」、「デンマークの掃海艇がドイツの機雷を無力化」、「ナンシーで空襲警報」、「Lloyd George、国際会議に賛成」、「トルコ軍の戦闘力」、「President Harding 号の負傷者たち」、「外洋での戦争」、「魚雷攻撃を受けた船の生存者たち」であり、英語版の記事の見出しは「西部戦線は静かな日」、「ベルリン、計算が当たる」、「オタワ記念碑で（軍の）すべての部門の像」、「ノルウェーの貨物船沈没、乗組員は救助」（魚雷によるものとのみ報道）、「上院議員、独裁者ヒトラーを攻撃」、「スペイン大使、パリに戻る」である。
 37. Sassoon 財閥が1935年に完成させた蘇州河沿いの南天潼路の高級アパート。Sir Victor Sassoon はその1階を難民支援に提供していた。現在の河浜大橋。
 38. 上海ユダヤ人学校は蘇州河以南の共同租界の西摩路（現在の陝西北路）にあった。
 39. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 427.
 40. 写真が掲載されているのは、フランス首相 Edouard Daladier、イギリス国王 Georg 6 世、フランス大統領 Albert Lebrun、イギリス戦争相 Leslie Hore-Belisha、イギリス自治領相 Anthony Eden、イギリス海軍相 Winston Churchill、イギリス首相 Neville Chamberlain、前海軍本部長 Alfred Duff Cooper、フランス蔵相 Paul Reynaud、連合軍最高司令官 Maurice Gustave Gemelin 将軍、イギリス蔵相 Sir John Simon、イギリス遠征軍最高司令官 Viscount Gert 少将の12人。
 41. Mark Siegelberg (1895-1986)。ウィーン出身のユダヤ人ジャーナリストで、1938～1939年 Dachau および Buchenwald の強制収容所に抑留された後、上海へ移住した。太平洋戦争直前の1941年にオーストラリアへ移住。
 42. 先述のように Ossi Lewin は『Shanghai Jewish Chronicle』の編集者であり、記事にはイニシャルの「O. L.」と署名している。
 43. Eduard Benesch (1884-1948)。第1次世界大戦中チェコスロバキアの独立運動を指揮し、1918～1935年チェコスロバキア外相（1921～1922年首相を兼任）、1935～1938年大統領、1938年のミュンヘン会談後イギリスへ亡命、1945～1948年大統領。記事の出典は不明だが、亡命先のロンドンの新聞か。
 44. Heinrich Mann (1871-1950)。20世紀前半に活動した非ユダヤ系ドイツ人作家。ナチスが政権につくとフランスに移住し、そのナチス批判によりドイツ市民権を剥奪された。1940年にアメリカへ移住した。
 45. Jichok Lejb Perez (1852-1915)。ポーランド出身のユダヤ人でイディッシュ語作家。
 46. Hicem はアメリカの「ヘブライ移住者援助協会」(Hebrew Immigrant Aid Society / HIAS)、イギ

リスの「ユダヤ植民協会」(Jewish Colonization Association / ICA)、ドイツの「ユダヤ移民管理委員会」(Emig-Direkt) が1927年に統合して生まれた。極東事務所 (The Far Eastern Jewish Information Bureau / Daljewcib) は HIAS 時代から置かれていた。

47. Brith Hachayal は上海のシオニストグループの中の軍事的組織、Brith Trumpeldor (Betar) は青年部。

本稿は平成22年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「人間の安全保障の観点による上海のユダヤ人難民社会の研究」(研究代表者: 阿部吉雄) による研究成果の一部をまとめたものである。